

## 「国境なき医師団」による「人道」の構築

—北朝鮮における人道援助活動の事例から—

### MSF's Crafting "the Humanitarian":

A Rhetorical Analysis of Discourse on Humanitarian Aid in North Korea

久保田 絢  
Aya KUBOTA

#### Abstract

The study reveals the rhetorical process by which Médecins Sans Frontières (MSF) crafted the meaning of "the humanitarian" focusing on discourse on humanitarian aid in North Korea where opinions of aid organizations were divided and struggles over meaning of the act of humanitarianism became clear. Opposing a story of those who decided to remain and continue aid activities, MSF's constructed a unique humanitarian story to justify its withdrawal from North Korea. In the story, humanitarian action shifts from action of "sentiment" to that of "indignation," and "the humanitarian" is independent from "the political." The analysis also reveals that the type of audience, heroism, and dialectical world view affected the story construction. Although MSF's story has its own dilemmas and limitations, MSF has played a significant role in the process of crafting the humanitarian in that MSF's construction of the humanitarian locates the problem of the adversaries' and announces it to society posing an alternative point of view.

*Key Words* : humanitarianism, politics, Médecins Sans Frontières, North Korea, narrative analysis

キーワード：人道、政治、国境なき医師団、北朝鮮、物語分析

#### はじめに

本研究では、北朝鮮における人道援助に関する「国境なき医師団」(MSF)の言説を、他の援助団体の言説と比較し、その特質を分析することにより、1990年代に「人道」という言葉が平和構築や政治的安定と結び付けて考えられるようになっていく中で、MSFがいかにそれに対抗する「人道」概念を構築していったのかを明らかにする。90年代以降、人道援助における

様々な問題点が次第に浮き彫りになるにつれ、人道援助活動がかかえるジレンマや矛盾が指摘されるようになったが、「人道」という言葉の意味づけについての研究はまだ発展途上である。特に日本においては、まったく未開拓であるといつてよいだろう。

「人道」という言葉が使われるようになったのは1830年代以降である。19世紀フランスの哲学者・文献学者のリトレは「人道的」という形容詞を「人類全体にかかわるもの」、人道主義者を「集合的存在としての人類の擁護者」と定義づけた（ダンドロー、2005、p. 8）。しかし実際は「人道」という概念は、植民地主義に対するヨーロッパ諸国民の支持をとりつけるために政治的に用いられていたのである（Rieff, 2002）。その中で、普遍性、独立性、中立性の原則を掲げる赤十字社の登場により、「人道」は「政治」と切り離して考えられるようになる。第二次世界大戦後しばらくは人道を理由に用いた政治介入は原則として行われていなかった。人道援助団体の数が著しく増え、あらゆる人間を救援する具体的行為において「人道」という言葉はいつそう知られるようになった。90年代に入り人道援助の効果が疑問視されるにつれ、「政治」と「人道」が再び結び付けて考えられるようになる。人道援助は平和や民主主義という政治的目的を達成するための一手段との考えが支配的になり、「人道」という言葉は援助行為のみならず平和構築を目的とするあらゆる行為に使われるようになっていく。その結果、1999年NATOがユーゴスラビアを攻撃した際、「人道的爆撃 (humanitarian bombing)」という言葉まで登場した。

このように「人道」という言葉が無制限に使われる状況に危機感を抱き、「人道」とは何か、人道行為とは何かの条件づけを行おうとしている団体の1つが国際医療人道援助団体「国境なき医師団」(MSF)である。人道援助の抱える矛盾を明らかにした*A Bed for the Night: Humanitarianism in Crisis* (2002)の著者であるDavid Rieff (1999)は、「人道」という言葉の意味づけに関しては、MSFがこれまで重要な役割を担ってきたと指摘する。多くの援助団体が「人道」の意味づけを問うことよりも実効性を重視し、政治的解決による平和構築<sup>(1)</sup>を人道援助の目的と定めるようになってきているのに対し、MSFは「人道」という言葉の意味づけの重要性を指摘し、政治的安定から切り離された人道援助のあり方を探ってきた。MSFは国連など多数派とは違う人道援助のあり方を提示することで「人道」という言葉の意味をめぐる論争を巻き起こしてきたのである。

さらに本研究で取り上げる北朝鮮の事例は、さまざまな援助の事例の中でも特に、「人道」という意味の揺れが顕在化した事例であるという点で注目に値する。北朝鮮政府による独裁体制が援助を自らの都合で操作しようとする中で、援助を継続するべきか、それとも撤退するべきかで意見が2つに分かれ、ある団体は援助を継続し、ある団体は北朝鮮から撤退した。身の危険以外の理由で人道援助団体が撤退するというのは極めて珍しい事例であるといえる。こうした特異性をもった事例を分析することにより、人道という言葉のもつ葛藤を浮き彫りにすることができると思われる。

## 1. 分析枠組み

人道援助は、援助を必要とする人がいるという状況があり、その問題を解決したいという意思があるだけでは成立しない。すなわち、その意思が多くの人に理解され、共有される必要があるのである。したがって、人道援助団体が機能するには、問題や目的、自らの立場等についての共通の認識枠組みが必要になる。つまり人道援助には絶えず象徴作用が介入してくるのである。この象徴作用は人道援助において極めて重要なキーワードである。人道援助団体は、必要な人に援助を届けるという活動であると同時に、「人道」という言葉について特定の認識を促すメディアでもある。

本研究ではイタリアの社会学者 Alberto Melucci (1985, 1996) と Kenneth Burke (1973) の理論を参考にしながら、認識枠組みの形成・発展過程 (framing process) を分析する。認識枠組みの形成・発展過程とは、置かれた状況に応じて集団的行為を言葉で表現していく過程であり、Melucci (1985, 1996) はこの語をイデオロギーとほぼ同義で用いている。Burke (1973) の理論を援用するなら、認識枠組みとはそれぞれの人の個別の認識が共有される共通の物語とすることができる(2)。認識枠組みの形成・発展過程には (1) 活動者 (social actors) の定義づけ (2) 敵対者 (adversary) の定義づけ (3) 集団的目標の定義づけが含まれる。

しかし、Melucci (1985, 1996) の理論では、社会運動が自らの認識枠組みすなわちイデオロギーを形成・生産する上で、聞き手の期待と社会的文脈とどのような相互作用があるかについては触れられていない。そこで本研究では、Burke (1973) の理論を取り入れ「社会知形成・生産の問題を、論理学や文芸においてあらかじめ決定されている公式や定理 (episteme) に依拠することなく、あくまでも聴衆の憶見 (doxa) や社会的文脈との相互作用によるダイナミックな運動の中で」追求するという視点を取り入れたい (藤巻, 2009, p. 264)。

援助研究において、また、コミュニケーション研究において、人道援助に介入する象徴作用に着目した研究は、なされてこなかったといっても過言ではない。Robert DeChaine (2005) が指摘しているように、つい最近まで人道援助の物語性、すなわちレトリカルな側面は重視されてこなかったのである。しかし、近年まだわずかではあるが、Wilson & Brown (2009) のように、人道運動がどのようにして人びとの心を捉えるかという問題に関し、法律、制度、論理学といったこれまでの人道援助を研究する上で主に用いられてきた視点では不十分であり、人道運動を物語としての認識することが不可欠であるとの見方も出てきている (p. 19)。MSF をレトリックの観点から研究したものとしては、DeChaine (2005) *Global Humanitarianism* がある。この研究は人道援助団体のレトリック性に注目しているという点で重要であるが、具体的な事例の中で研究を行っていないため、分析が抽象的なレベルに留まっているという点で、また、物語が創造される上で決定的な役割を果たす聴衆の分析が行われていないという点で不十分である。

そこで本研究では、MSF と MSF とは反対の立場をとる援助団体の言説を比較分析することにより (1) 北朝鮮をめぐる MSF の人道物語のレトリック戦略、(2) 物語を生み出したモーテ

イブ<sup>(3)</sup>、(3) MSFが提示した物語の功績と限界について明らかにする。

## 2. 北朝鮮における人道援助をめぐる問題の背景

1995年に北朝鮮で発生した洪水は、ソ連崩壊後悪化していた国内状況をさらに深刻化させた。正確な数は不明だが、1995年から1999年までの死者は300万人とも言われている<sup>(4)</sup>。北朝鮮における飢餓は国際的な注目を集め、日本を含む周辺諸国や米国、世界食糧計画（WFP）などの国連機関、数多くの民間人道援助団体が支援に乗り出した。世界でも最大規模の援助が行われていたとされている。

北朝鮮に対する援助は、2つの点で論争を呼んだ。第1は、援助物資ははたして本当に必要な人のところに届いているのだろうかという事実をめぐる論議である。人道援助は援助関係者以外の人が入り込めない場所で行われることが多いため、実情は外からは見えにくい。特に、北朝鮮においては、ジャーナリストが入国を許可されることはめったになく、たとえ入国を許されても行動が著しく制限されるため、実情を完全に把握するということが極めて困難であるといわれる<sup>(5)</sup>。このような状況においては、援助団体が報告した内容が検証されることなく真実として理解されることが多い。

当初、援助を行っている多くの団体は、必要としている人へのアクセスが取れているという報告を行っていた。一方で、次第に北朝鮮政府が援助を厳しく監視・制限していることを非難する援助団体が現れ始める<sup>(6)</sup>。それらの団体によると、北朝鮮側は同意した通訳者しか同伴を認めず、状況調査を監視し行動を制限し、援助の効果を援助者が査定する際には一週間前までに通知しなければならないなどの制限を課したとされる。数々のこうした証言が公表されるにつれ、必要な人に援助が届いていると主張していた継続側も制限がかけられていた事実を認めざるを得ない状況となっていった。このように援助が必要な人へ届いていないという事実が明るみに出るにしたがって、第2の争点を取り上げられるようになってきた。

それは、北朝鮮政府による操作が原因で必要な人に援助が届いていない可能性のある状況において、北朝鮮国内に残って援助を継続するべきかどうかという問題である。たとえ制限があったとしても必要とする人がいる以上援助を続けるべきであるとの主張と、援助は北朝鮮の抑圧的な独裁体制を支えていることになるので援助を継続すべきでないという主張とに援助団体の中でも見解が分かれた。WFPや赤十字をはじめとする多くの団体は北朝鮮側の要求する条件を受け入れ、援助活動を継続した。一方、いくつかの援助団体は北朝鮮国内における援助活動を中止した。MSFは1998年に撤退し<sup>(7)</sup>、フランスの援助団体ACF（Action contre la Faim）は1997年に、Oxfamは1999年に撤退した。このようにこの第2の争点をめぐっては、人道援助の目的、「政治」と「人道」の関係性など「人道」の意味づけをめぐる対立が浮き彫りになったのである。

### 3. 継続側の物語

WFPや国際赤十字社など多くの援助団体が創出した物語は、自然災害に苦しむ北朝鮮への援助という枠組みで語られた。1995年の災害で多大な被害が出たことを強調し、北朝鮮の被害者に対する援助の必要性が訴えられている。ここでは北朝鮮全体が「被害者」として語られている傾向が見られる。国連や国際赤十字社などは北朝鮮政府による農業政策の失敗を指摘しつつも、北朝鮮政府はあくまでも被害者を救うパートナーであると位置づけているのである。たとえば、国際赤十字社は1996年に出された活動報告書（*World Disasters Report 1996*）の中で次のように記述している。「援助団体がニーズに対して応えようとすると、北朝鮮政府は予想外の寛容な姿勢を見せた。」(p. 110)「北朝鮮政府は深刻な状況を隠し立てせずに語り、援助を受け入れる用意があることを表明している。」(p. 110)。そして、必要な人への自由なアクセスが確保されていることを強調しているのである。

しかし、北朝鮮政府の非協力的姿勢や反人道的行為が明らかになるにつれて、報告書のトーンにも変化が見られるようになる。1つは、こうした困難な実情がありながらも、援助はよい方向に向かっているという「前進」が強調されるようになったことである<sup>(8)</sup>。

2つは、援助が政治的安定に貢献しているという主張が現れたことである。たとえば国際赤十字社の報告書には、次のように記載されている。援助は政治に利用されている可能性はあるものの、それは肯定的に捉えるべきものである。東アジア地域の安定のためには、北朝鮮と周辺諸国ならびに西欧諸国をつなぐ橋渡し役が必要不可欠であり、北朝鮮で活動している援助団体はこの役割を果たしているのであると (p. 85)。ここでは政治的安定への貢献が人道援助の役割の1つとして語られている。

この物語の中では、援助者は自然災害による被害者に対して、手を差し伸べる。援助は多少の困難や障害がありながらも着実に成果を上げ、さらに、援助者は無償で北朝鮮に援助を行うことで北朝鮮政府の態度の軟化を促し、朝鮮半島地域の政治的安定に貢献しているという物語が語られる。したがって、この物語の中で非難されるのは北朝鮮政府ではなく、撤退した援助団体ということになる。撤退を決めた援助団体は必要とする人を置き去りにし、地域の政治的安定という大きな任務をも理解しない自分勝手な行動をとるものとして描かれるのである。

### 4. MSFによる対抗的物語

こうした物語に対して、MSFは別の物語を提示する。まず北朝鮮における飢餓の問題を政治的・社会的問題へとシフトさせた。すなわち、北朝鮮政府の飢餓の原因は北朝鮮政府によるものであるという因果関係を明示化したのである。MSFの北朝鮮政府に対する批判はさらに以下3点に分けられる。

#### (1) 「飢餓は北朝鮮政府による失敗の結果である。」

WFPや国際赤十字社など、多くの援助団体は飢餓の原因が、自然災害であることを強調したのに対し、MSFは、飢餓を政治の失敗の結果と位置づけ、自然災害は一要因でしかないという

立場を鮮明にした。たとえば、「すべての人が食糧不足の影響を受けているわけではない。食糧へのアクセスの資格が与えられているかどうかの問題である」という発言にそれが表れている。(Terry, 2004, p. 92)

(2) 「飢餓発生後も、北朝鮮政府は解決への努力を怠っている。」

継続側はこの点には一切触れていない。MSFは「金正日は先月ロシアから4億4000ドル相当の武器を購入した。一方で北朝鮮国内では何百万人も国民が飢餓で死に直面している。」(Terry, 2001)といった北朝鮮政府と一般市民の対比のレトリックを用い、「贅沢三昧で自分勝手な抑圧者である北朝鮮政府」と「北朝鮮政府の抑圧を受ける犠牲者である北朝鮮の排除された人びと」という関係性を鮮明に描き出す。この対比のレトリックにより、「悪」の北朝鮮政府とその犠牲者としての北朝鮮の人びとという善悪の構造を構築しているのである。また、この対比のレトリックは、読み手が北朝鮮政府に対し激しい憤りを感じさせる効果を期待したものと見ることもできる。

(3) 「北朝鮮政府は援助を掌握し、もっとも弱い立場にある人びとから援助物資を奪っている。」

継続側の多くは、こうした疑惑に関し触れようとしないのに対し、MSFはするどく指摘する。「金正日政権は、社会の「敵対的」分子に対する食糧の配給を著しく制限することで、それらの人びとの排除を進めようとした。」このように、継続側が北朝鮮政府をあくまでも援助を行う上での「パートナー」と捉え、態度の軟化を期待したのに対し、MSFは北朝鮮政府をはっきりと「抑圧者」と位置づけているのである。

MSFの物語は、「情」の物語から「憤り」の物語への転換を図っているのであるということもできる。従来、人道援助団体は、Boltanski (1999) の指摘するように情に訴える戦略をとってきた。被害者への同情を呼び起こすことに専念し、加害者の追及は行わないという姿勢である。これに対し、MSFは、加害者と被害者の因果関係をはっきりと示し、聞き手を加害者への非難に導くための戦略をとっている。つまり、MSFの物語は北朝鮮の人びとを抑圧し、援助を妨害する北朝鮮政府に対する闘いの物語なのである。

この物語の中で援助を継続する側は抑圧に加担するものとして描かれる。MSFは援助活動において「適切な形で援助する自由」、すなわち(1)「人びとと接触する自由」(2)「自らが援助のニーズを調査する自由」(3)「援助が届けられたかどうか確認する自由」という三原則を適用することが不可能な状況にある場合、人道援助＝「人のための行為」という構図が崩れ、人道援助＝「政治的抑圧や暴力の手段」となってしまうと指摘している。

また、MSFは援助が政治的安定に貢献しているとの継続側の主張を厳しく非難している。MSFは人道援助が平和構築につながる、もしくは人道援助は平和構築のための一手段であるという「人道」と「政治」の結びつきをはっきりと否定する。たとえ平和の促進(＝政治的安定)が北朝鮮の人びとの生活の向上に結びつくとしても、朝鮮半島の平和を促進することは人道援助団体の役割ではないと主張するのである<sup>(9)</sup>。さらに、平和の促進が人びとの生活の向上

に結びつくという因果関係に対しても完全に同意はできないという立場をとっている。その根拠は次のように示される。「人道」とは、もっとも弱い立場にある人に人道的な理由から手を差し伸べる行為である一方、「政治」とは国全体、社会全体にとって最善を重視するという違いがあり、そもそも方向性が違うとMSFは指摘する。もっとも弱い立場にある人とは、政治的に排除された人である。しかし、政治的安定はしばしば弱い立場にある人の犠牲の上に成り立つものであり、政治的安定は必ずしも排除された人の生活の向上を意味しないのである<sup>(10)</sup>。このような考えから人道主義運動は、政治的アプローチとは別の角度からなされなければならないものであり、つまり政治では抜け落ちてしまう部分を補う抗議活動でなければならないとMSFは主張するのである。したがって、平和構築への貢献は援助の継続の根拠にはなり得ないということになる。

さらに、継続側の物語の恣意性を強調し、継続側の構築した物語の信憑性に疑問を投げかけている。例えば、国連の調査委員会が必要な人へ支援が行き届いてないことを報告書に記載したところ、当時のWFP事務局長が削除を要求したという例を紹介している。

では、人道援助者がこのような状況で行うべきことをMSFはどのように考えているのであろうか。1つは人道援助者が抑圧者に加担してしまうということのないよう「適切な形で援助する自由」の確保を最優先に考えるということである。もし不可能な場合、援助を中止すべきであるとする。ただし、北朝鮮国内での援助の中止は来た朝鮮問題から目を背けることではない。北朝鮮の困窮した人びとに寄り添った援助であるべく、MSFは中国、韓国で引き続き北朝鮮から逃れてきた人びと、すなわち脱北者への援助を行っているのである。

2つは、世論への訴えかけを継続的に行うことである。北朝鮮における援助の実情について、北朝鮮の人びとの生活状況について証言活動を行い、世論に訴えることで北朝鮮政府に国際的圧力をかけることが大切であると述べている。MSFはこの証言活動を、人道援助団体のもう1つの役割であると規定する。証言活動は、沈黙することによって、抑圧者の側に加担することになることを避けるため、そして世論喚起によって現状を変えるために不可欠であるとMSFでは考えている。北朝鮮国内から撤退した後、MSFは中国や韓国において脱北者支援活動を行っている他<sup>(11)</sup>、北朝鮮国内での援助の実態についての積極的に証言を収集し、世論に現状を訴えている<sup>(12)</sup>。証言はMSFの北朝鮮での過去の活動から得たものと脱北者から聞き取ったものとの2つに分けられる。

それは以下8つの項目に分類されている。1つは国境を越えた理由である。ここでは、食糧が全くない状況が説明され、飢餓が原因で親類が死亡した、もしくは病気であること、国境で警備隊に殺される危険を冒してまで北朝鮮を脱出しなければいけないほどの飢餓に苦しんでいることなどが記されている。2つは女性に対する援助の状況についての証言、3つは高齢者に対する援助の状況についての証言である<sup>(13)</sup>。女性の中でも特に保護をもっとも必要とする妊婦でさえ、食糧の配給を受けていないという証言が紹介されている。その他、農民の食糧へのアクセス状況（ほとんどが軍隊に食糧は回されている証言が記載されている）、北朝鮮における食

糧配給システム、国連による査察に関する証言（北朝鮮政府が援助が必要な状況を意図的に演出している状況が記されている）、北朝鮮における強制送還と関連する刑罰、外国からの援助が操作されている問題（援助物資が市場で売られていること、外国からの援助物資について聞いたことはあるものの一度も受け取ったことがないといった証言が記されている）がある。これらの証言を直接引用する形で提示することで、北朝鮮政府の責任と援助の失敗を客観的事実として立証している。

MSFによる対抗的物語の提示は、撤退を当然の帰結として認識するよう聴衆に積極的に語りかけていると言えるだろう。

## 5. MSFの物語を生み出す視点

MSFは継続側の人道物語に対して独自の物語を展開し、認識の変化を促した。変化を促すこととなった彼らの視点には3つの特徴が見られる。

### （1）聴衆

継続側の物語との大きな違いの1つは聴衆の違いである。継続側の多くの団体は、政府など公的機関から活動資金を得ている。国連などはその最たる例である。したがって、継続側の多くの団体にとって聴衆とは活動資金を提供してくれる政府などの公的機関ということになる。したがって、活動資金の確保のために、政府の欲求を満たす物語を提供しなければならない。

一方、MSFは活動資金の8割近くを民間からの援助で賄っている。したがって、聴衆は政府ではなく、一般市民である。政府の意向を反映する必要がないという利点を持つ一方で、MSFには一般聴衆の心を満足させる課題が課されている。人道援助団体に聴衆が求めるものは、「正義の側にいたい」、そして「人のためによいことをしている」という感覚であろう<sup>(14)</sup>。

### （2）ヒロイズム

そもそも人道援助が注目を集めてきた背景には、人のためにつくすヒーローに自らを同一化したいという人びとの欲望があったことは否定できない。特に西欧社会では、植民地政策についての罪悪感や抑圧された人びとを救うはずの共産主義が、逆に人びとを抑圧する政治体制を生み出していることへの幻滅があった<sup>(15)</sup>。人のためという名目で進められてきたことが、いつの間にか「人のため」ではなくなってしまう。そのようなフラストレーションを解消するものとして期待されたものが、「人道」という言葉であり、中でもMSFはその中心にいた。MSFの掲げる「国境なき主義」は、あらゆる障害を乗り越え「もっとも必要な人に寄り添う」という徹底した「人のための」援助を掲げ、1980年代フランスで絶大な支持を得た<sup>(16)</sup>。いかなる法や権力にも屈することなく、弱者に寄り添うヒーロー像に自らを同化させることによって人びとは「人のためによいことをしたい」という欲望を満たしてきたのである<sup>(17)</sup>。

政治的目標を人道援助の上位にかかげることは、「もっとも必要な人のために」という理念の妥協を余儀なくされるとMSFは考える。必要な人に援助が届けられないということに加え、MSFの構築してきたクリーンなヒーロー像には見合わないという問題もあった。MSFがこれ



まで提供してきたヒロイズムの物語と政治的妥協を人道援助の前面に出す物語とは相容れない。聴衆はヒーローが妥協の中で行動していく物語を求めてはいないのである。常にヒーローは正義の側において、人が自らを同化させたいと望むようなクリーンなイメージを採たなければならない。MSFはこれまでレジスタンスのヒーロー像を作り上げて、聴衆の期待に添えてきた。その枠組みや聴衆の期待感がMSFの行動を規定し、MSFはさらにそのヒーロー像を発展させていったのである。MSFオランダ支部の意思決定プロセスを分析したLiesbet Heyse (2006)は、意思決定はニーズの客観的分析のみで行われるわけではなく、「MSFらしさ」をアピールできる事例に積極的に介入していく傾向があると指摘しているが、抵抗するヒーロー像がまさにMSFらしさの1つと言える。北朝鮮の事例においてもこの抵抗するヒーロー像の物語が語られたのである。

### (3) 弁証法的な世界観

弁証法的な世界観もMSFの人道物語を構築する拠り所となった視点であると考えられる。対極の視点を提示することで問題点・対立点を浮き彫りにし、議論を活発化させることで人道に関する問題の改善を目指すのである。特に「政治」と「市民社会」が公の場で批判しあひながら、問題を解決していくという構図をMSFは描いているように思える。このように「政治」と「市民社会」を対立的に捉える視点は、フランスの左翼知識人の伝統的考えに由来すると考えることもできるかもしれない<sup>(18)</sup>。対立軸に自らなることで、社会をよくしていこうという弁証法的な社会のあり方を理想像は、1999年のノーベル平和賞受賞スピーチ中の「人道主義は政治の失敗に対する市民の答えなのです。」(Orbinski, 1999)という言葉に顕著に現れている。ここに「政治」と「人道」が補完的でありながらもまったく別のものであり、融合することなく、せめぎあってお互いのチェック機能を果たすべきであることが明示されているといえよう。

### おわりに

最後にMSFが提示したこの対抗的物語の功績と限界について論じたい。MSFの物語は、対立軸を示し、これまで見えてこなかった問題を顕在化させたという点で評価されるべきである。「現実」が外からは見えにくい状況の中で、敢えて対立軸となることで、継続側の物語の限界を顕在化させ、論議を巻き起こすという戦略はMSFのように政府や権力に頼らず、民間から資金に頼って活動することのできる人道援助NGOにしかできない大切な役割である。MSFは援助関係者の間で批判も多いが、問題の本質を問い直そうとしたその意義を積極的に評価する視点があってもよいのではないだろうか。

ただし、これはMSFの物語が継続側の物語よりも正当であるということの意味しているわけではない。以上で述べてきたように、MSFの物語もまた継続側のそれのように社会的文脈や聴衆の期待とのダイナミズムで生み出されているのであり、当然限界がある。北朝鮮の事例におけるMSFによる人道援助物語の限界を3つ指摘しておく。1つは、犠牲者の視点が欠けてい

るという問題が挙げられる。証言活動を行うことで、犠牲者の声を引用してはいるもののMSFの作り上げた物語の枠組みの中で語られているので犠牲者を主体とした物語としては伝わってこない。犠牲者の声はMSFの擁護声としてのみ現れるのである。したがって、犠牲者が何を求めているのかMSFの物語から理解することは難しい。

2つは、MSFの物語を支える根拠となっている脱北者の証言の偏りの問題である。脱北者は「もっとも援助を必要とする人」であることには間違いないが、「もっとも援助を必要とする人」を脱北者に限定することはできない。たとえば、脱北者が住んでいた地域以外ではMSFの主張する必要とする人が援助を受けることができている可能性は否定できない。このことは、MSFの物語を不安定なものとしてさせている。

3つは、MSFの物語自身も「人道」と「政治」に関するジレンマを内包しているという問題である。MSFはもっとも必要とする人に援助を届けることを第一の目的とし、政治的安定は自らの役割ではないという立場を鮮明にしていることについては先に述べた。一方、政治的解決なくして飢餓問題は解決しないのだから人道援助も政治的でなければならないという意見が現在の援助関係者の中では支配的である。政治と人道の一体化を目指す現在の国連改革<sup>(19)</sup>を見ればこの考え方が支配的であることは明確である。実際には、MSFも人道問題の解決に政治の力も必要であることは認めている<sup>(20)</sup>。しかし、MSFは政治的解決に協力することは人道援助従事者の役割ではなく、政治の役割であると考え。なぜなら政治的解決とは、全体の安定のために一部の人びとを犠牲にすることを認めてしまうからである。MSFの提示する「政治」から切り離された「人道」は人道援助が困窮した人の救済から政治的安定へと移ってしまい、困窮した人への救済という本来の目的が達成されない危険を避けることができる一方で、人道問題に必要な根本的解決を提供することができないのである。

本研究により人道問題に関するレトリック批評家の1つの役割として浮かび上がってきたことは、「人道」のかかえる多義性を理解し、双方の物語の間に存在する軋轢を明らかにすること、そしてそれらの物語がいかにして構築されたかを詳細に分析し、新たな物語を生み出すための手がかりを提供していくことである。

## 【注】

- (1) 国際協力の場合には、「平和」とは、紛争予防、紛争の終結促進、紛争後の平和の定着など政治的に限定して捉えられている。
- (2) 藤巻光浩(2009)を参照されたい。
- (3) ここでいう「モーティフ」とは「変化」(transformation)を促す拠り所となる視点を形成する作用を意味する(藤巻, 2009, p. 289)。Kenneth Burke(1973)、藤巻(2009)を参照のこと。
- (4) MSF(2005, July 21)を参照のこと。
- (5) フォラツェン(2001)参照のこと。
- (6) MSFが撤退後、援助を必要としている人へのアクセスの問題を繰り返し述べているほか、北朝鮮にて2年あまり活動を行い、2000年に国外追放となったドイツ人医師ノルベルト・フォラツェンが

- 著書『北朝鮮を知りすぎた医者—国境からの報告』の中で「援助物資はどこへ消えるのか」について詳細に記している。(この本は日本において大反響を巻き起こした。) Oxfam系列の月刊誌*New Internationalist* (April 2009) の中でも北朝鮮における援助が北朝鮮政府によって利用され、必要としている人に届かない現状についての報告を行っている (Bossuet)。
- (7) MSFは1995年8月政府の要請で活動を開始。1995年8月から12月にかけて北朝鮮国内にスタッフが滞在し、政府の監視下で活動、1997年6月から9月にかけて、スタッフが北朝鮮国内に滞在し、独立した活動を行おうとするが阻まれる。1998年4月、「北朝鮮におけるチームの活動がいかに制限を受けているかについて、また援助物資の最終的な届け先に関する疑念について公表」、同年7月北朝鮮との交渉が決裂、9月に北朝鮮から撤退した (ビネ, 2008)。
- (8) International NGO Conference on Humanitarian Assistance to DPRKにおける国連開発プログラム北朝鮮事務局長David Mortonの発言や1998年から2001年にまでのConsensus Statementを参照されたい (UN, 1998, November; UN, 1999, December; UN, 2001, March)。
- (9) Terry (2004) を参照のこと。
- (10) Bradol (2004, March 31) を参照のこと。
- (11) 2003年、中国政府の脱北者とその支援者に対する規制がさらに強化されたため、中国での援助活動は中止を余儀なくされ、脱北者支援の活動拠点は、現在韓国に移っている。このことについてはMSF (2005, May 12) を参照。
- (12) MSFは自身のWebsite等で証言を公開しているほか、2002年5月20日にアメリカ議会で証言を行っているほか、2003年1月24日に日本の国会議員の集まりの中で証言を行っている。MSF (2002, May 2) に議会での発言内容、MSFが集めた証言が記されている。
- (13) 女性と高齢者は弱い立場にある場合が多く、援助のアクセス状況を図るときに女性と高齢者は注視されることが多い。
- (14) 苦しんでいる人に援助することで、または援助する人に自らを同化させることで心の満足を得るということの問題性については、さまざまな論議があり、重要な論点ではあるが、この分析は別の機会に譲ることとする。たとえば、この問題はイグナティエフ (2003) や Boltanski (1999) らによって論じている。
- (15) Rieff (2002) を参照のこと。
- (16) MSFの人気を示す1つの例として1980年代にフランスで行われた世論調査がある。その中で、MSFは就きたい職業の第3位に入ったといわれる。(Bortolotti, 2004)
- (17) Boltolotti (2004)、15頁を参照されたい。
- (18) 藤村 (1985) を参照のこと。
- (19) 人道援助を平和構築の下位に位置づけた。「平和」とは、紛争予防、紛争の終結促進、紛争後の平和の定着など政治的に限定してとらえられているため、平和構築の下位に位置づけられるということは、政治との一体化につながると考えられている。国連改革についてわかりやすく説明したものとして、中満泉 (2008) 「国連人道問題調整室」『国際緊急人道支援』内海成治、中村安秀、勝間靖編がある。
- (20) 1999年にノーベル平和賞を受賞した際の受賞スピーチの中でも述べられているし、その後の政治と人道の関係性をめぐる発言の中でも繰り返し主張されている。

#### 【参考文献】

(日本語文献)

- イグナティエフ、マイケル (2003) 中山俊宏訳「帝国主義者としての人道主義者」『軽い帝国—ボスニア、コンボ、アフガニスタンにおける国家建設』風行社 61-98頁。
- ダンドロー、ギョーム (2005) 西海真樹、中井愛子訳『NGOと人道支援活動』白水社。
- ビネ、ロランス (2008年6月) 「人道援助のジレンマ『独裁政権に利用された人道援助活動』—北朝鮮におけるMSF」『React - Real humanitarian action [人道援助とは何か]』国境なき医師団日本。

- フォラツェン、ノルベルト（2001）瀬木訳『北朝鮮を知りすぎた医者—国境からの報告』草思社
- 中満泉（2008）「国連人道問題調整室」『国際緊急人道支援』内海成治、中村安秀、勝間靖編 ナカニシヤ出版 p. 36-55
- 藤巻光浩（2009）「ケネス・パークのあまりにレトリカルな歴史／物語・記憶」鈴木健、岡部朗一編『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』世界思想社 259-302頁。
- 藤村信（1985年3月）「セヌ左岸の暮れ方—フランス左翼と知識人」『世界』No. 472. 272-303頁。

（英語文献）

- Boltanski, Luc. (1999). *Distant suffering: Morality, media and politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bortolotti, Dan. (2004). *Hope in hell: Inside the world of doctors without borders*. U.S.: Firefly Books.
- Bossuet, Jérôme. (2009, April). Special feature: Inside North Korea. *New Internationalist*. pp. 4-8.
- Bradol, Herve. (2004, March 31). Challenges to humanitarian action: The impact of political and military responses to international crises. *MSF article*. Retrieved November 2, 2008 from <http://www.msf.org/msfinternational/invoke.cfm?component=article&objectid>
- Burke, Kenneth. (1973). *The philosophy of literary form: Studies in symbolic action*. Berkeley: University of California Press.
- DeChaine, D. Robert. (2005). *Global humanitarianism: NGOs and the crafting of community*. Lanham: Rowman & littlefield Publishers, Inc.
- Fiona Terry. (2001, June 6-9). Food aid to North Korea is propping up a Stalinist regime. *The Guardian Weekly*.
- Fiona Terry. (2004). North Korea: Feeding Totalitarianism. *In the shadow of the 'just wars': Violence, politics and humanitarian action*. U.S.: Cornell University Press.
- Heyse, Liesbet. (2006). *Choosing the lesser evil: Understanding decision making in humanitarian aid NGOs*. England: Agshgate Publishing Limited.
- International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies. (1996). *World Disasters Report 1996*.
- Melucci, Alberto (1985). The symbolic challenge of contemporary movements. *Social Research*, vol. 52 (4), p. 789-816.
- Melucci, Alberto. (1996). *Challenging codes: Collective action in the information age*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morten, David. (2000). Present situation in the DPRK. *International NGO conference on humanitarian assistance to DPRK June 30-July 2, 2000 Tokyo, Japan conference proceedings*. National Christian Council in Japan.
- MSF. (2002, May 2). Additional testimonies of North Korean refugees. *MSF Article*. Retrieved April 28, 2009, from <http://www.msf.org/msfinternational/invoke.cfm?objectid>
- MSF. (2005, May 12). Democratic people's republic of Korea/South Korea: Aiding traumatized refugees. *MSF Article*. Retrieved April 28, 2009, from <http://www.msf.org/msfinternational/invoke.cfm?objectid>
- MSF. (2005, July 21). Aid workers warn of North Korea's forgotten health crisis. *MSF Article*. Retrieved April 28, 2009 from <http://www.msf.org/msfinternational/invoke.cfm?objectid>
- Orbinski, James. (1999, December). The Nobel Peace Prize speech. *MSF 2000 international activity report*. Retrieved December 4, 2004, from <http://www.msf.org/content/page.cfm?articleid=6589CCA6-DC2C-11D4-B2010060084A6370>
- Rieff, David. (1999). Humanitarianism at century's end: The good doctors. *The New Republic*. 221

(19) P. 23.

Rieff, David. (2002). *A bed for the night: Humanitarianism in crisis*. NY: Simon & Schuster.

UN. (1998, November). Statement of humanitarian principles.

UN. (1999, December). Consensus statement of all UN agencies, NGOs and donor agencies operating in the DPRK.

UN. (2001, March). *Consensus statement*.

Wilson, Richard Ashby & Brown, Richard D. (2009). Introduction. *Humanitarianism and Suffering: The Mobilization of Empathy*. Cambridge: Cambridge University Press.